

復員後、昭和二十二年結婚。現在夫婦共に元気。子は男、女、女と三人、孫は六人、皆元気です。香川県出身の同部隊同年兵相寄り相睦み、老体の無事を喜ぶ幸せに感謝し、中国大陸に散った英霊の御冥福を、御家族の御多幸を祈ること切であります。

## 大陸に

### 散華の戦友を偲びて

兵庫県 横田芳郎

私は兵庫県神崎郡福崎町福田で生育しました。家族は両親の元に姉・兄・私・妹二人の五人兄弟でした。父は鉄道貨物取扱運送業を営み、順調な生計をしておりましたが、昭和五（一九三〇）年、病氣にて他界しました。その後、気丈な母親のお陰で兄弟仲良く無事に成長しました。

私は尋常小学校卒業後、旧制県立中学校に進学しました。学校の周辺は第十師団管下の各兵科の兵営並び

に広い練兵場等があり、完全な軍都でした。中学の教科の中に配属将校担当の軍事教練が取り入れられて、野外演習など、相当厳しく鍛えられました。四年生の時に、陸軍士官学校や海軍兵学校への軍人志望者の募集に応じて多くの級友が進みました。

私は体力に自信がなく軍人の途を諦めて、卒業後、専門学校に進みました。そこを卒業後は東京の会社に就職して、川崎市にて下宿していました。そして十二月八日が来ました。太平洋戦争勃発です（当時は大東亜戦争と呼称）。

緒戦の大戦果が発表されるや、全国民の熱狂的興奮でした。東條首相が日比谷公園に現れて大演説を行い、戦勝気分が酔う国民は絶頂にあり、私も一目見ようと人波に揉まれながら東條首相を目撃した時は感動しました。今もあの時の情景が、心の片隅にあります。もちろん、私もその年に（昭和十六年徴集）徴兵検査を受け、第一乙種の現役兵でした。昭和十七年二月一日から昭和二十一年六月二十日まで（四年五ヵ月）軍人として服務しました。

所属は、中支派遣軍（槍兵団）第六十八師団の歩兵でした。中部第六十八部隊篠山連隊へ入営しました。前日は町内会・婦人会から小学生にいたるまで、日の丸の小旗を打ち振っての盛大な見送りを受けての入営でした。故郷の名誉のためにも頑張るぞと意気衝天でした。

初年兵としての初歩教育を受けました。同じ班の男が、野球好きな人なら誰でも知っている全国中等学校野球選手権大会・中京商業対明石中学の延長二十五回戦の偉業をなした明石の大投手楠本です。当時私は、あの名勝負を、ラジオに囁りついて聞きました。アナウンサーが声を枯らして叫んでいた、あの剛腕剛球投手楠本が、今自分の隣にいる。軍隊や戦友って意外なものだなあと我感ぜりです。

彼とは初年兵教育の間、絶えず一緒に訓練を受け、起居を共にしました。彼は大きな体格であったが敏捷に行動していました。しかし毎朝の点呼後に兵営の裏山（盃山）へ登る日課では、楠本は体重が重くて、登山には大変苦勞していました。その点私は身軽であっ

たから、教育係に見られぬように「楠本、頑張れ」と、彼の大きな尻を押し上げていた古い記憶が今もあります。

二月二十一日、篠山第六十八連隊を後に外地への出勤命令です。歩武堂々と行進し、そして鉄路で関門に着く。門司で六〇〇〇トン級の輸送船に乗船、出帆しました。船内は三段仕切りの蚕棚になっていて、他部隊と同居のすし詰めでした。

無事上海到着・小型船に乗り換えて、さらに上流へ進み、長江の要衝九江に上陸し、さらに瑞昌まで行進しました。

独立歩兵第六十二大隊へ到着、私達は第一中隊に入り、現地で本格的な初年兵教育を受けることになりました。昼間屋外訓練はもちろん、夜間、班内における各典範令教育は敵として行われ、一にも二にも「貴様らは現役兵だ」で活を入れられました。私達初年兵全員一生懸命頑張った甲斐あって全員見事検閲完了で肩星が二つの陸軍一等兵になりました。

私に中隊長室に米いと呼び出しがあり、入室すると中隊長から「横田、貴様は幹部候補生を受験しろ」と命ぜられ、幸運か不運か不明なれど受験すると、甲種幹部候補生に採用され、久留米の陸軍予備士官学校へ入学と決定しました。最も仲の良かった楠本とも半年余りで別れることとなり寂しかったものです。彼も「運と生命があつたらまた会おう」と別れましたが、これが最後の言葉になろうとは。

彼は第一線で敵陣に対した時に、手榴弾の投擲では全軍で一番でした。遠隔投法でトーチカの銃眼へ一発の手榴弾の投入で敵陣を撃破、余人には真似のできな超偉業です。さすが甲子園を沸かせた名投手でした。昭和十八年七月、彼は江南作戦終了後、黄梅地区戦闘のみぎり、敵弾に倒れ名誉の戦死との報に、悲痛な思いが胸中を走りました。もし戦後に彼がいれば、日本プロ野球界に貢献しただろうに。

私は昭和十七年十月、久留米陸軍予備士官学校に入校し、日夜研鑽に努めました。この半年間は我が人生における最大最高の修練の期間でした。これは筆舌

に表現できないほどです。

翌十八年三月、任見習士官、中国に渡り、武昌に於いて同期士官の現地集合教育を受けました。後、原隊復帰で独立歩兵第六十五大隊第四中隊へ配属になりました。

所在地は、鉄鉱石の特産地で有名な大冶鉄山の西方数十キロの地点の「劉仁八」という所でした。大隊長西山中佐に申告して、第四中隊に赴任を命ぜられ、中隊長村瀬中尉の所へ行くと、中隊幹部集合中のところでした。全將校に一度で申告及び面接ができたと同時に、次期作戦会議にも加わりました。莫大な現地資料、なかならず地図の整理照合、分断紙片を全部接合して、友軍の進軍状況・密偵による敵の配置・布陣位置等々を勘案すれば、攻撃目標は自ずから常徳である事が判明しました。

昭和十八年十月、常徳作戦に出撃しました。常徳は湖南省の西北部に位置し、人口三十万人の大都市で、諸物資の集散地で市民生活は豊かでした。昔から「湖

南総らば四川飢えず」といわれ、南都の長沙に対し、西方の政治・経済・軍事の中心地として重慶の蔣介石軍の補給命脈のかかった重要拠点でした。畑支那派遣軍総司令官は重慶攻略戦を大本営に進言するも之は却下された。せめて蔣政権に打撃を与えるためには、常德・長沙方面を攻撃するが適切であると判断され常德作戦の命令が発せられました。

当時、常德には蔣介石直系の精鋭第五十七師団約一万三千人が防備、布陣していました。街の周囲の城壁は一層敵重に石や煉瓦を積み上げ、所々には堅固なトーチカを作り難攻不落だと言って、兵隊を激励したとか。後日談、砲兵隊が砲弾の信管を取って弾丸のみを敵陣の土壘の上に撃ち込んで置くと、敵はいつ爆発するか分からず全員退却したとの事だった。笑い話でした。

我が隊の駐屯地、劉仁八を出発、攻撃目標常德に向かって進軍する。私は先頭に立って張り切るも、足にマメ、靴傷、股擦れ等、でも弱音を発したら物笑いだ

と頑張りました。分隊長や古年次兵の猛者連中はよく私を助けてくれました。以来我が小隊は全員「兄弟だ」を合言葉にして、一丸となりました。

常德城外に到着、攻撃準備に万全を期し待機、砲撃開始で山砲・重機関銃一斉射撃を開始、百雷一度に落下の如き轟音である。各隊逐次匍匐前進する。砲撃中止で全小隊突撃敢行、城壁にたどり着く。中隊長は戦況や如何と、眼鏡を手に仁王立ちにて仰視される。時に音も無く朽ち木のごとく倒れられた。「中隊長殿！」と抱き起こせば、鮮血顔面に滴る。一発の敵弾が頭部を貫通、名譽ある戦死でした。おしむらくは最期の言葉が一言ほしかった。第六十八師団長閣下の賞詞参照。

## 賞 詞

独立歩兵第六十五大隊第四中隊

右ハ中隊長陸軍中尉村瀬將指揮下ニ昭和十八年十一月常徳殲滅作戰ニ参加シ常ニ第一線中隊トシテ勇奮健闘毎戦大ノ戦果ヲ挙げ大隊ノ任務達成ニ寄与セル所

大ナリ即チ十一月二十一日滄吸瀨ノ徳山市ニ至ル堤防道ニ多数ノ掩蓋銃座ヲ設備シタル前哨陣地ニ據レル約五百ノ敵ヲ果敢ニ撃破シテ徳山市北側地区ニ進出シ戸田支隊ノ圧迫攻撃セル敵ノ江北岸ヘノ脱逸ヲ阻止セルノミナラス爾後ニ於ケル大隊ノ戦闘ヲ有利ナラシメ次テ徳山市北方沅江支流ノ敵前渡河ニ際シ大隊ノ左第一線中隊トナリ十一月二十三日払曉重火器ト緊密ナル協力ヲ保チツツ熾烈ナル敵火ヲ冒シテ断乎敵前渡河ヲ強行シ大隊渡河成功ノ素因ヲ拓キタルノミナラス折柄ノ濃霧ヲ利用シ常德ニ到ル縦深約四杆ニ及フ堤防道ニ沿フ敵數線陣地ヲ一挙ニ急襲突破シテ岩坵北端敵主陣地前ニ挺進シ独力克ク執拗ナル敵ノ逆襲ヲ制シテ同地ヲ確保シ大隊ノ爾後ノ攻撃ヲ極メテ容易ナラシメタリ更ニ十一月二十五日ヨリ十一月二十八日ニ亘ル大隊ノ常德東門攻略ニ方リテハ中隊ハ大隊ノ第一線攻撃隊トナリ敵ノ主陣地ニ突入シ堅固ナル「トーチカ」陣地ヲ逐次粉碎シツツ東門ニ迫リ引続キ常德複廓陣地攻撃ニ於テハ同大隊第三中隊カ常德東門北側城壁ノ一角ヲ占領シ優勢ナル敵ノ逆襲ヲ受ケタル際機ヲ失セス中隊長

率先シ中隊一丸トナリ敵中ニ突入シ接戦格闘ノ後敵ノ逆襲ヲ破摧シ戦果ヲ拡張中隊長先ズ頭部ニ敵彈ヲ受ケ東門ニ壮烈ナル戦死ヲ遂ク幹部以下死傷続出戦闘惨烈ヲ極メタリト謂モ中隊ハ不屈不撓互ニ相励マシ志氣愈々旺盛横田見習士官ノ指揮ヲ以テ遂ニ東門ノ一角ヲ占領確保シ大隊ノ常德城内攻略ノ端緒ヲ得ルニ至ラシメタリ是実ニ中隊長ノ積極旺盛ナル攻撃精神ト部下將兵ノ奮戦力闘ニヨリ至難情況下克ク中隊團結精華ヲ發揮セルモノニシテ其ノ武功拔群ナリ仍テ茲ニ賞詞ヲ授与ス。

昭和十九年五月十日

第六十八師団長 佐久間 為人 「花押」

右戦闘において中隊長はじめ多くの戦友が斃れました。陣没軍人を收容し、涙ながら茶毘に付しました。立ち上る煙は遠く故郷の空へ、そして靖国の森にと飛んで還られるだろう。捧げ銃でお見送り申し上げました。なお戦傷痍者は後送收容し、戦場掃除を実施しました。そして各々英霊には年月日及び場所（戦線名）

等、でき得る限り詳細記録を付し後送しました。敵の將兵戦没者も懇ろに埋葬の記録が有ります。そして作戦終了で劉仁八の駐屯地に帰營しました。

司令部より「任陸軍少尉、横田芳郎」の辞令が届きました。折しも大阪や和歌山方面から入隊の初年兵があり、その兵隊の教育係を命ぜられ、一期の検閲終了までその任に着き、同終了と同時に湘桂作戦参加で出動、桃林地区に集結しました。

この頃より米空軍機の跳梁激しく、昼間の部隊行動は不能状態で、夜陰に紛れての進軍が多くなりました。私は尖兵小隊長として部隊の最前線を進行しました。昼間に充分形図地誌等を頭に入れて、夜間先発誘導等で、自分が一歩誤れば、全軍が徒労に帰します。細心に注意して行動しました。

時に昭和十九年六月、衝陽地区の戦闘となります。敵將は方先覚將軍で蔣介石直系の第十軍の二個師団が防衛陣を布設し、彼らは第一次・第二次長沙作戦並びに常德作戦で日本軍と勇敢に戦った戦士軍団です。我が軍は湘江渡河に成功し、衝陽の南方地域に進出しま

した。この時に、佐久間師団長が最前線並びに敵状視察に来られました。敵は逸早くこれを察知し、一斉砲撃を加えてきました。台上に在りし幹部全員被弾され、師団長はじめ原田參謀長、橋本大隊長と多くの方々が重傷を負われるという、予想だにできなかった不測の最大事態が発生しました。

衝陽は完全防禦で縦横に塹壕を巡らし、その前面には鹿砦と鉄條網（有刺鉄線）を幾重にも張り巡らされている。進軍して初めて敵の防禦体制を知ると、我が軍の偵察の不充分な事が判明した次第です。

友軍は、第六十八と第百十六兩師団の協同作戦で七月上旬より攻撃開始。我が中隊は、先陣で衝陽市街への大公路の左右に分かれ、路傍を一系列縦隊で前進していました。灼けつくような炎天下でした。後統部隊との連絡もあり「中隊、止まれ！」で小休止中の所。敵の監視所から発見されたのか、猛烈なる迫撃砲弾の一斉砲撃を受けました。突如ヒュルヒュルと不気味な音が頭上にしたと思つた瞬間でした。私の前にいた金井中隊長が直撃され、五体が半ば飛散して即死の「名蒼

の戦死」です。私が中隊長代理として率先敵陣突入の覚悟でした。

後続中隊の掌握を指揮班長と後任小隊長に託して最前線に進出しました。廃屋の民家に入り壁の間から敵陣を目撃、数十メートルの地点に敵兵を発見、軽機関銃射手に射撃を命じました。数人の敵兵の倒れたのを目撃しました。中隊長の敵討ちをしたと思えました。その瞬間でした、屋根が落ち壁は倒れ、周囲一帯砲煙と土埃が朦々と立ち込め、真っ暗な中に顛倒し踞っていました。

分隊長が「小隊長！ 怪我は如何か」と問われ、初めて自分が負傷したのに気付く。彼に「お前はどうか」と尋ねました。彼は尻から出血ですと言う（後刻判明腹腔損傷）。私は右脚と右腕と胸の三カ所。衛生兵が来て応急手当、巻脚絆と編上靴が真っ赤に染まり、出血激しく意識薄れて記憶無しの状態でした。

気付いた時は戸板の上に横たわっていました。周囲は負傷者が充満していました。分隊長は腹に突き刺さった砲弾の破片を手術で取り除き一命を取り止めた

由、戦線の野戦病院は応急手当のみで重傷者の呻き声、苦痛に耐えて唸る声、この世とは思えぬ生き地獄とはこのような光景でしょうか。私の傷口も包帯の上に膿が沁み出ると蠅が止まり、たちまち蛆が沸きます（この蛆虫を食用にする戦線もあったとか）。私は軍医殿や衛生兵に助けられ、薬も食料も十分に頂戴して無事生き延びました。ただただ感謝あるのみです。

約半年、破片は体内に残置するも、行動、歩行はできるようになり、一応原隊復帰で奇跡の生還だと隊員に迎えられました。

零陵にてホッと一息ついたと思ったら「任横田少尉五十八旅団司令部に配属を命ず」。

以後、芷江作戰参加、引続き司令部と行動を共にしました。第五十八旅団長加藤大佐、高級副官宗村大尉その他司令部付幹部将校と共に行動しました。かくして終戦を迎え、衝陽において武装解除、抑留生活を送りました。

昭和二十一年四月日本帰還のため衝陽出発、上海に

集結。復員船にて同年六月二十日仙崎港に上陸、軍隊生活に幕を引き（復員）我が家へと帰りました。

思い起こせば数度の激戦に陣頭に立って敵に遭遇し、二度も三度も生死の境、紙一重のところになりながらよくぞ生還したものだ、不思議です。我が家の門に立ち、口から出た最初の言葉は母を呼ぶ声でした。

兄嫁と妹が迎えてくれ、母は前年三月に亡くなり「芳郎の顔が見たい」が最期の言葉だったとの事。私は暫く茫然と佇んでいました。そして兄はフィリピンで戦死との事。

私は思った、二度と戦争はしては駄目だ。平和の尊さや有り難さを子や孫に次世代の人々に語り伝えることが戦争体験者に科せられた義務である。そして戦没者の御冥福をお祈り申し上げます。三拝、合掌。

## 北支より中支へ

### 極寒の夜行軍

山形県 鈴木清一

私は、大正十三（一九二四）年三月三十日、山形県西置賜郡飯豊町で、農家の六人兄弟の長男として生まれました。徴兵検査は昭和十九（一九四四）年で第一乙種合格でした。

昭和十九年九月五日、山形東部第五十九部隊へ現役入営しました。

その当時の私の家庭の構成は

父	健康	農業（二町歩）	山林
母	〃	〃	〃
本人	〃	〃	〃
妻	〃	〃	〃
姉	〃	結婚して他家へ	〃
二男	〃	農業	〃